異世界に行ったら魔物使いになりました。4

I'm a Monster Tamer!

佐竹アキノリ
Satake Akinori

ケダマ
(ハネツキケダマライオン→???)
進化してますます食欲旺盛な獣。
ポンコツ丸
ちょっぴり間抜けな
空飛ぶ機械型魔物。
クーナ
(天狐→???)
狐型魔物の少女。
狐姿の時は尻尾が4本。
ゴブ
(ゴブリン→???)
仲間思いでお調子者の
トラブルメーカー。
シン・カミヤ
突如異世界に飛ばされ、
魔物使いとなった青年。
スキルを駆使して仲間を増やし、
彼らの主として旅をする。
ライム
(ゆきんこスライム)
実はスライムの女の子。
つるつるでひんやり。
ウルフ(大氷狼→???)
賢く忠誠心の高い狼。
パーティの良心的存在。
ナマクラ丸
シンを親友と呼ぶ、
おしゃべりな刀。
主な
登場人物
Main
Characters

1

その日も俺シン・カミヤと仲間の魔物たちは、妖怪たちの街を歩いていた。
ここに来てから結構日がたっているため、着物を着た小鬼たちが歩いていたり、ねじり鉢巻きに褌の飛脚狐が走っていたりする光景にもすっかり慣れてきている。
昼間からぶらぶらしている俺であるが、遊んでいるわけではなく、大事な目的があるのだ。
「シン、あれは？」
俺を呼ぶのは、雪女とスライムが合成されたゆきんこスライムのライムだ。
白妙の和服がよく似合う彼女は、なにかを見つけたのかと思いきや――寿司の屋台を指差していた。
そういえば、お昼ご飯まだだったなあ。魔物使いたる俺にとって、魔物たちで大所帯になったパーティの食事管理も、立派な仕事の一つだ。決して、遊んでいるわけではないのである。
魔物使いの能力により共感覚を得ているため、俺の魔物たちの様子はすぐに伝わってくる。
スフィンクスが混じった魔物ハネツキケダマライオンのケダマは、食いしん坊ですでに涎を垂らしているし、そんなケダマと仲のいい大氷狼のウルフも鼻をひくつかせている。そしてゴブリン

のゴブは勝手に動き回ろうとしているところを、機械型魔物のポンコツ丸に捕まえられていた。
「お昼にしましょう、シンさん」
天狐の少女クーナが尻尾を揺らしながら俺に提案してくる。
「じゃあそうしようか。あそこの屋台でいい？」
「はい。高くありませんし、最近は実入りがよくないのでちょうどいいでしょう」
クーナはしっかり者だから頼りになる。お財布の紐はすっかり握られてしまっているが、それだけ安心できるということでもある。なにしろ、俺の魔物たちの食費は馬鹿にならないから。
屋台にやってくると、俺は寿司を頼みつつ、スキルを用いて魔物たちを小型化する。
そして台の上でケダマたちがムシャムシャと食べ始めるのを見ながら、これからどうしようかと考え始めた。
「うーん。なんとかしてガッポリお金を稼ぐ方法はないものか……」
「親友、楽して稼げる方法なんざありゃしないぜ。地道に稼ぐことを考えな」
腰元の刀、ナマクラ丸が俺にお説教をしてくる。
そんなことは言われずともわかっているが、魔物たちがよく食べるから仕方ないのだ。そう、今だってこのように――
「おいっ！　そんな高いネタばっかり食うなよ！」
俺が気付いたときには、ゴブは高級なものばかり選んで食べている。そしてケダマはいつの間に

か、屋台を空にする勢いで貪っていた。
「あ、ああ……そんな……」
呆然とする俺の前で、ポンコツ丸がその二体を捕まえるが、食べたものは戻ってこない。
俺はお金が入った袋に視線を落とす。代金を払うと僅かしか残りそうもなかった。
「シンさん。見ていなかった私の不注意です」
「頑張って稼ごう？　ね、シン」
クーナとライムが慰めてくれる。その優しさにジーンと来ていると、店主が声をかけてきた。
「なんだあんちゃん。金がないのか。それなら御前試合に出たらどうだ？」
「御前試合と言いますと？」
「知らないってこたあ、ここに来たばかりだな？　毎年、この時期になると将軍様の前で行われる試合があるんだ。もちろん、将軍様に拝謁する名誉のために戦うんだが、いくらかは賞金も出る」
そこで俺はふと、本来の目的を思い出した。
ライムと出会った遺跡にあった古文書には、旧世界と呼ばれる土地があると書かれていた。それが彼女の過去や俺に関わっているのではないかと、情報を求めて旅をしながらナマクラ丸の故郷であるここまでやってきたわけだが、そこでまた新たな謎が生まれた。
将軍と一緒にこの街を治めていた千年前の魔物使いが、俺によく似ていたのだ。将軍はナマクラ丸の知り合いとのことで、いかにもなにかありそうだ、と情報を集めていたところなのである。

「金が入って、しかも将軍様に会えるってことか」
「そういうこった。あんちゃんたち、強そうなんだから腕試しにいいんじゃねえか？」
「あ、やっぱり強そうに見える？　過酷な長い旅をしてきたからなあ」
「いや、そっちのわんこや鉄の人形のほうだ」
「……そんなことだろうとは思った」
俺はがっくりしつつも、こんな扱いには慣れてきている。魔物使いなんだから、そりゃ主役は俺じゃなくて魔物たちだろうさ。
だけど、やるときはやるのだ。俺にだって意地がある。
「よし、早速参加申し込みをして、特訓をするぞ！」
俺は共感覚を用いて優勝したあとのことを伝える。ケダマには食べ放題のイメージ、ゴブにはかっこよくてモテモテの姿、ウルフには俺たちの信頼、そしてポンコツ丸には立派な機械パーツを。
張り切る魔物たちとともに、俺は優勝に向けて動き始めた。

◇

御前試合の予選当日、俺たちは会場にやってきていた。
そこかしこから住人が集まっているらしく、本戦は後日だというのに辺りには様々な出店が立ち

並び、妖怪でごった返している。その中には選手もいるのだろう。
俺は彼らの姿を見ながら、腰に佩（は）いたナマクラ丸を掴んだり放したり、何度も繰り返す。握っている間はナマクラ丸の能力で歴戦の剣士さながらの技術と実力であるが、手放したら凡人（ぼんじん）の域にまで落ちてしまう。なんとか技術を維持できないかと試してみるも、そんなことができたなら俺はとっくに名剣士になっていることだろう。つまり、才能がないのだ。
しかし、そうとわかっていても、ナマクラ丸なしで戦わねばならない理由がある。今回の戦いは個人戦だが、ナマクラ丸は魔物だから一体とカウントされてしまうのである。
そして千年前の魔物使いにちなんで剣技を競うそうで、ケダマは論外だし、ウルフは向いていない。ナマクラ丸は自身だけで動くことなんかできやしないし、ライムは接近戦が得意ではない。
ゴブでは参加費をドブに捨てるようなものだし、今回は俺とクーナ、ポンコツ丸が参加することにした。
だから責任重大なのである。
俺は少し緊張しつつ、辺りを窺（うかが）う。あらかじめ参加登録しておくことが推奨（すいしょう）されており、自信がある選手はとっくに準備運動をしている。飛び込み参加もできるそうだが、そんなお祭り気分でやってくるようじゃ話にならないだろう。
俺はこれまで頭を使って切り抜けてきたのだ。今回だって、魔物はいないが知恵で切り抜けてみせる。

そう意気込みながら周りの参加者を観察する俺の服を、陽気に鼻歌を歌っていたゴブが引っ張る。緊張していた俺は気付かなかったのだが、ゴブが次第にぷんぷんと怒り始めたところで、ようやくその存在を認識できた。

「……なんだよ。屋台でなにか食いたいのか？　金なら渡すから、俺のことは放っておいてくれ」

とてもゴブの相手をしている気分ではない。

お金を入れた袋を渡すと、ゴブは元気に走っていった。なにか問題を起こしそうだが……まあいいか。

受付では、支払いを済ませている者はすぐに通ることができた。飛び入り参加のほうは長蛇の列ができているので、あらかじめ手続きを済ませておいてよかったなあと感じる。

それから予選の内容を確認する。予選はいくつかのブロックに分けて行われ、数十人がまとめて戦い合い、制限時間を生き残った者が勝者となるようだ。

俺とクーナ、ポンコツ丸は別のブロックなので、予選で当たることはないだろう。

ひとまずクーナに叩きのめされる心配はなくなったので一安心だ。もっとも、強い魔物はほかにもたくさんいる可能性が高いが。

その後刃引きされた武器を選ぶことになると、俺が刀、クーナは剣、そしてポンコツ丸は無数の腕を取り出して片っ端から掴んでいく。後ろに並んでいた魔物の分がなくなった。

「重くて動けなくなりそうだな。半分くらいにしておけば？」

俺が告げると、ポンコツ丸は重量バランスを確認してから、取捨選択を済ませた。こういった計算は非常に速いのだが、いかんせん、こやつはなかなかにドジである。どうなることか。

やがて時間が近づくと、選手と観客では待機場所も異なるため、ここで別れることになる。

「シン、頑張ってね。でも、怪我しちゃダメだよ」

俺の手をぎゅっと握って微笑むライム。彼女が応援してくれるのだから、頑張らねばなるまい。

俺はナマクラ丸を掴んだり放したりしていたが、それをライムに預けた。

「親友、緊張するなよ。リラックスしねえと、刀は振れねえからな」

そんな助言を貰うと、俺は一つ深呼吸するのだった。

一方、ケダマとウルフがポンコツ丸をせっせと磨いている。ぴかぴかになったポンコツ丸はガシャンガシャンと全身から音を立てて彼らの期待に応えた。

そうして俺はクーナ、ポンコツ丸とともにそれぞれの控室に向かう。

俺はたった一人になり、屈強な魔物たちの中に沈黙して座していた。決してクールを気取ってるわけではない。ここにいる魔物たち、筋骨隆々で切り傷だらけでどうみてもヤバいのだ！

俺は不安を払拭すべく、自分のステータスを確認する。

《シン・カミヤ　Lv22》

ATK105　DEF80　MAT83　MDF71　AGI102

【スキル】

「大陸公用語」「鑑定」「主従契約Lv6」「魔物合成」「小型化」「ステータス還元Lv4」
「成長率上昇Lv3」「バンザイアタック」「スキル還元」「スキル継承Lv3」「血の代償」
「炎魔法Lv7」「風魔法Lv1」「水魔法Lv5」「氷魔法Lv6」「幻影術Lv4」「神通力Lv2」

攻撃力と素早さは三桁に突入してるし、防御力、魔法攻撃力、魔法防御力の数字も低くはない。そんじょそこらの魔物には到底負けるはずがない能力値だ。

確かに俺自身は強くないかもしれないが、「ステータス還元」のスキルにより、いつだって仲間の魔物たちの力とともにある。

俺はあいつらの期待に応えなければならない。だからこんなところで負けていられない。

そんな俺を鼓舞するかのように歓声が上がった。どうやら第一試合が始まったようだ。共感覚を通じてライムの視界を得ると、クーナが一瞬で魔物どもを蹴散らす姿があった。

やっぱりクーナは頼もしい。俺も負けていられない。

「よし、やるぞ」

いよいよ出番が来ると、立ち上がって気合を入れる。

ほかの選手たちとともに、眩しい日の光に出迎えられながら俺はステージに上がる。そして開始の鐘が鳴ると一斉に魔物たちが動き始めた。

肉がぶつかり合い、鉄と鉄が音を奏でる。

その中で俺は激しく剣を切り結ぶ――なんてことはなく、一回戦で敗退した。

◇

俺たちはその晩、豪華な食事を取り囲んでいた。

新鮮な刺身や、山菜類がたっぷり入った混ぜ込みご飯。しっかり出汁の利いた汁ものなど、たくさんの和食が膳の上に並んでいる。

「クーナとポンコツ丸の勝利に乾杯！」

俺が告げるなり、魔物たちが喜びの声を上げる。ウルフとケダマは一緒になって肉球をぽんぽんと打ち合わせた。

まだ予選とはいえ、クーナもポンコツ丸もあっさりと勝利を決めてきた。そう、あっさりと。

クーナがもてはやされる中、俺はポンコツ丸に給油してやる。今回の油はちょっと奮発しているので、ポンコツ丸は嬉しげだ。

「にしても親友、ありゃあねえよ。もう少しよお、粘ってから負けるならともかく――」

「うるせえな。俺だって負けたくて負けたんじゃねえ」

ナマクラ丸の食事を抜くことを心に決めながら、俺はそっぽを向く。するとゴブがやってきて、

俺の肩をぽんぽんと叩いてきた。
なにこれ。俺、ゴブにすら慰められてるの？　正直、落ち込む。
へこみながら自分の席に戻るとケダマがいた。俺の食事を旨そうに食っているケダマが。
「自分のところに戻れよ！」
ケダマを掴んで、元の席に投げる。すると、そこにあったはずの食事がない。もう食べ終わったから、俺のを食べていたらしい。
歯型が付いてしまった料理をケダマに与えつつ、俺は自分の料理を食べ始める。皆が勝利に浮かれる中、俺だけは敗戦を噛み締めながら食うのだ。無念。
そんな俺にライムが微笑み、そっと箸を持ってくる。摘まんでいるのは、先ほどケダマに食われてしまったせいで俺が食えなかった蕎麦だ。
「いいの？」
「うん。シンと一緒に食べたほうがいい」
そんな嬉しいことを言ってくれるライム。
俺はそれすら欲しがるケダマをぐいぐいと押しのけ、ありがたく一口。なんとも美味である。キンキンに冷えた蕎麦は、喉元をつるりと滑っていく。
「シンさん、このお蕎麦あったかくて美味しいですね」
と、クーナ。見れば、彼女の蕎麦は湯気を立てている。

俺はライムの手を取った。ほんのりと顔を赤らめる彼女。
彼女はひんやり冷えていて、相変わらずゆきんこスライムらしい。
俺はクーナの言葉に返すこともできず、茶を啜った。
「ああ、温かくて美味しいな」
こんなにも心温まる日々を送れるのだから、俺は幸せである。
食事が終わり、今後の試合も頑張ると、クーナとポンコツ丸が決意を述べる。そうして一日が終わっていく中、俺は鬼の将軍の姿を思い浮かべる。本当に会えたとき、なにを言えばいいものかと。

◇

試合本戦の日、俺は観客席にいた。
ナマクラ丸を携えた俺の隣にはケダマを抱きかかえたライムとウルフがいる。ポンコツ丸とクーナは控室に行っていた。ゴブはどこかに飛んでいった。たぶんトイレかなんかだろう。
第一試合は、大きな鬼と小柄なクーナの試合だ。
本戦ではトーナメント形式で試合が行われていくが、全試合がこの会場で行われるため、丸一日使って試合が進んでいく。
「美しき狐の姫君、クーナ！　予選では華麗なる戦いを見せてきたが、果たしてこの巨体には通用

するのか!?」
司会が煽る。
俺はそんな言葉を聞きながらも、クーナなら大丈夫だろうと確信していた。なんせ、俺はあの大きな鬼の力を知っている。この身をもって殴られて弾き飛ばされたんだから、知らないはずがない。かなりのパワーだが、クーナの技量が上回るだろう。
いよいよ試合が始まると、鬼がクーナに棍棒を振り下ろすが、クーナはあっさりと回避し、鬼を何度も何度も切りつけていく。
「いいぞ、やっちまえ、クーナ！」
俺は予選の恨みも込めて叫ぶ。
その応援に勢いづいたクーナは一気に攻め込んだ。相手の力を利用してぶん投げ、さらに剣を突き立てる。一瞬で全身をしたたかに打たれた鬼は、もう立ち上がることなどできやしなかった。
試合の終了とともに小鬼たちがやってきて、倒れた鬼を運んでいく。
クーナの見事な戦いぶりに観客は沸き立つ。無理もないことだ。なんといってもうちのクーナは強いだけじゃなく可愛いから。ちょっと歩いているだけでも見惚れてしまう魅力があるのに、こんな凛とした姿を見せられたらファンクラブができかねない。そうなったらどうしよう。
俺が浮かれていると、クーナがこちらを向いて手を振ってきた。
予選敗退の俺は、本戦の初戦を勝利した彼女に手を振り返す。なんとも情けない図である。

次に試合が行われたポンコツ丸も難なく勝ち残って、観客に数十の手を振るのだった。
しばらく俺の魔物が出る試合はないからと、食事を買いに立ち上がりかけたとき、二体の魔物が入場してきた。
一体は鬼の体に牛の頭を持つ魔物、牛鬼である。もう一体は、小さな緑の肉体で、顔には布を巻き付けている。
小さいほうはステージに上がると棍棒をぶんぶんと振り回し、なんだか見覚えのあるポーズを決める。
「小さな体に秘められた力は果たしていかほどのものか！　謎の覆面小鬼、ボブ！」
紹介されるとますます調子に乗って棍棒をぶん回している姿は、どこをどう見ても見間違えようがない。
ボブっていうのは、世を欺く仮の姿……なんかではなく、単にスペルを間違えたんだろう。あいつ間抜けだから。
「なんであいつが……っていうか、ゴブですら予選は通ったのに、俺は通らなかったのか……」
落ち込む俺の頭をケダマがぽんぽんと叩くと、ウルフが一緒になって俺を撫でる。
俺は非常に人望がある、ということにしておこう。泣けてくる。
やがて試合が始まると、牛鬼が鉞を振り回す一方、ゴブはちょこまかと逃げ回っては棍棒を打ち付けていく。

俺はその姿を見ながら、ゴブも成長したんだなあと思う。思い返すのは、ゴブを投げるといつも敵の群れから逃げ帰ってきた姿だ。

そうだよなあ、ゴブだってあれから戦い続けてきたんだ。強くなるのが道理だ。

そんなことを考えていると、空を舞うゴブリンが見えた。

ああ、だめだったか。そりゃそうだよな、ゴブだし。

◇

何食わぬ顔で戻ってきたゴブは、負けたというのに鼻高々であった。

まあ、少しは見直したのは間違いない。空を飛んでたけど。

昼飯を食って休憩してから、二回戦が始まる時間になった。クーナは微笑み、ポンコツ丸はちょっと調子が悪そうにしながら会場に向かう。

試合はどんどん進んでいき、クーナは順調に勝利を収めていく。一方でポンコツ丸は、準決勝でネジが外れて動けなくなったところをやられた。やはりメンテナンスをしっかりしなければだめなんだろう。自動修復が追い付かなくなるまで酷使させてはならないことを学んだ。

そんなわけで、決勝戦まで残っているのはクーナただ一人。

けれど俺は心配することもなく、試合の成り行きを眺める。あと一回で優勝するところまで来たんだから、最後だって決めてくれるだろう。

決勝戦の相手はダイダラボッチ。巨人である。軽く足を動かすだけで対戦相手を蹴散らしてきた強者で、クーナの十倍近い背丈がある。

あんなのにどうやって勝てというのか、と観客の間にも諦めムードが漂っている。が、クーナを応援する者がいないわけではない。クーナのチャーミングな姿を見れば、応援せざるを得ないのだ。

俺はちょっと自慢げにクーナを見ている。彼女は普段と変わらない様子で、たくさんの剣をぶら下げていた。

数十本もの手があるわけでもないのに、なにに使うのかと思っていると、試合が始まる。ダイダラボッチの動きは早くないが、緩慢な動作も大きさの差があるせいで素早く感じられる。

クーナはダイダラボッチに飛び乗ったり、しがみ付いて移動したり、なんとかやり過ごしているが、それだけでは勝てるはずもない。

観客もダイダラボッチも、終わらない試合に焦れてくる。

そうなると、クーナは素早く移動して、ダイダラボッチに剣を突き立てた。大したサイズではないはずの剣の攻撃に、巨人は悲鳴を上げる。

見れば、剣が爪の間に刺さっていた。思わず片足を上げた隙に、クーナはもう一方の足を攻撃。

跳び上がったダイダラボッチの着地点を予想するなり、クーナは剣を地面に並べた。

足に剣山が突き刺さると、もはや体重を支えきれずダイダラボッチが倒れてくる。そう、観客の

ところへ！
ルールには場外負けが設定されているため、それを狙ったのだろう。さすがは俺のクーナ、実に賢い。
そんなことを思っていると、影が俺を包み込んだ。見上げれば巨大なダイダラボッチ。
……潰される！
俺は咄嗟にケダマの小型化を解除する。
「いけ！　ケダマ！」
むくむくと大きくなったケダマは、のほほんとした顔のままダイダラボッチの下敷きになる。すっかり潰れてしまったケダマだが、その時点になって慌て始めた。
「がおー、がおー！」
鳴きながら動こうとするケダマだが、潰れて座席の間に挟まっているため動けない。
「オレニマカセロ！」
ポンコツ丸が宣言すると、飛行形態になって助走をつけ離陸、速度を上げていく。
その間に俺たちは邪魔にならないところへと避難。
やがてポンコツ丸はターンしてきて、ケダマへと近づいていく。ぐんぐんと近づいて、間近になった瞬間、俺はケダマを小型化する。
支えを失ったダイダラボッチが倒れ始めると同時に間に滑り込んだポンコツ丸がアームを出して

ケダマをキャッチし、座席すれすれのところを一気に通り過ぎた。
ポンコツ丸は倒れるダイダラボッチの陰から抜け出すと、俺のところにケダマをぽんと放り投げた。それからゆっくりと速度を落として着陸。
俺はポンコツ丸を称賛しつつ、潰れたケダマを押して元の形に戻していく。不満げにしているケダマだが、お詫びに美味しい晩飯を約束すると、途端に嬉しげに俺の周りをころころ転がり始めた。
ダイダラボッチもようやく体を起こし始めると、試合がすべて終わった雰囲気になる。遅れて歓声が上がると、クーナは応えるように剣を掲げた。なんとも勇ましく誇り高い姿である。
やはり俺の魔物たちは素敵だ。ほかの誰にも勝るとも劣らない。
そうして俺たちは、将軍に会うための切符を手に入れたのだった。

◇

将軍の居場所へと続く道を、俺たちはクーナの尻尾を見ながらついていく。
周りには古めかしい屋敷がいくつもある。お偉いさんたちが住んでいる区画であり、普通は俺たちのような田舎者がやってくることなどない場所だ。
といっても、俺たち自身はあくまでおまけなのである。クーナの従者ということで、同行を許可してもらっているに過ぎない。

案内してくれている魔物は屈強な鬼で、大剣を腰に佩いている。失礼を働けば、あれで首を刎ねられるかもしれない。
迂闊なことはできないし、気を引き締めていかないと……
緊張気味な俺の前を、ゴブがケダマを転がしながら歩いていく。空気を読めと言うのはもう諦めたが、もう少し主人の気持ちを気遣ってくれてもよくないか？
呑気な二匹を見ていると、ウルフがちょっとだけ歩く速度を遅くして俺の隣に来て、肉球でぽんぽんと叩いて励ましてくれる。
……泥がついたんだけど。
このわんこもたまにはドジってしまうこともあるようだ。緊張しているのかもしれない。
普段ならこれでいいけど、将軍に汚い姿で会うのはなあ。そんなことを思っていたが、ケダマもゴブもすでに汚くなっている……まあいいか。
何度も角を曲がり、入り組んだ道を進んでいく。こうした複雑な街並みになっているのは、防衛のためだろうか。なにかあっても、簡単には逃げられなさそうだ。
そうしているうちに、巨大な城に到着する。
中に入るよう促されるが、なんだか処刑を待っている気分に近い。小心者なので、いざ本番になると帰りたくなるのである。
そんな俺のところにライムがやってきて、俺のズボンの裾を払い、寝癖を直し、服を整えてくれる。そして満面の笑みを浮かべた。
俺は気合を入れて、少し早歩きで歩き始める。クーナはすでに俺をおいて先に行っていたから。
階段を何度も上がって、ようやく辿り着いた屋敷には、俺たち一行だけが通されることになった。
「失礼します」
クーナが扉を開けて中に入ると、内部には巨大な柱が数本ある以外になにもなかった。薄暗い部屋の向こうに鎮座しているのは巨大な鬼。絡新婦がいた屋敷の納屋で見た置物とそっくりだ。
クーナが跪くと、俺も慌てて続く。ポンコツ丸がガシャンと大きな音を立てるのを聞いて不安になりながら、俺はぼんやりしているケダマを掴み、うろうろするゴブをウルフが床に押し付ける。
そして、ぎょろりと剥いた鬼の瞳がこちらに向けられた。
視線の先には、優勝したクーナ――ではなく俺だ。
「……魔物の従者たる魔物使いか！　初めて聞いたな、そのようなものは！」
大笑する鬼の将軍。
一目見ただけで魔物使いとわかるとは、やはり俺のことを知っているのか。ここは魔物が大量に住んでいるから、魔物を連れているだけでは判別がつかないはず。
「不思議そうな顔だな、シン。久しい我が主よ」
俺は鬼と契約したことはないし、どういうことかと思っていると、腰の刀がカタカタと揺れた。
「あー！　お前さん、お前さんじゃねえか。なんて言ったかな、まあいいや。久しぶりだなあー。

懐かしいな、お前さんが俺を使って、魚を串刺しにして焼いたのは今でも覚えてるぜ！」
「そのような記憶はないな」
……おい！　どうなってるんだよナマクラ丸！
知り合いだって言ってたじゃないか。全然会話がかみ合っていない！
優勝したのはクーナなんだから、本来は彼女が話すべきところだが、名前を呼ばれた以上は俺が話すべきだろう。
なにから聞こうか。
「やはり変わらないな。疑問が顔に出ているぞ。ならば一つずつ、説明するとしようか」
そう考えていると先に言われてしまったので、俺は頷くばかり。
ゴブがやれやれ、とでも言いたげに見てきた。こいつ、あとで晩飯に大量のからしを仕込んでやるから覚悟しておけ。
やがて鬼が語り始めた。
かつて一つの世界があった。その世界には自己を保存、複製する機能が備わっており、千年の時を経るごとに初期化して一からやり直してきた。
「主の言葉で説明するならば、バックアップを復旧してきたといったところか。世界が始まってから千年後、破滅へと向かいつつある世界は、それを回避するために、何度も過去の世界をロードした。千年間存在し続けた世界は消え去り、また一から世界が始まる。何度も何度も、同じことを繰り返してきた」
いったいなんの話であろうか。例え話なのか、それともこの世界にはそういった概念があるのか。
しかし、何度も世界がゲームオーバーからコンティニューし続けたところで、ゲームじゃあるまいし、時間はたっているのではないか。
「やり直したところで、それはよく似た世界が複製されただけではないのか？」
「いいや。時間すらも元に戻ってしまうゆえに、その世界は存在そのものがなかったことになり、新しい世界が取って代わる。そこに住まう者の意志も尊厳も生きた証もなにもかもが、完全に消え去ってしまう。だから世界に反旗を翻した者がいた」
世界云々についてはよくわからないが、自身の存在を消されるのに反抗したというのは、よくある心理だろう。
その者は、新しい世界に上書きされるのに抗ったという。
「そうして残ったのが、天に浮かぶ旧世界と呼ばれるものだ。あれは千年前、この我々がいる世界に上書きされて消されるはずの、滅びゆく世界だった」
そうあっさりと、俺が追い求めつづけた真実を告げる将軍。
旧世界は二千年前に生じ、千年前に消えるはずの世界だった。あまりにもあっけない解答に、俺は拍子抜けしてしまう。
「だが、消滅に抗ったとて、世界は破滅へと向かっている。だから旧世界の者たちは生き残るため、

千年前の新世界へと攻め込んだのだ」
さらに続く言葉に、俺は言葉を失った。
「消滅を拒んだ者も、旧世界からの侵攻と戦った千年前の魔物使いのどちらもお主だ、シン」
「へ……？」
俺がこの世界に来てからやったことといえば、今いるゴブやウルフたち魔物を集めたことくらいだ。そんな壮大なスケールの戦いなんて、経験したことはない。
そもそも俺はこの世界に来る前、日本でゲームをやっていたはずだ。平凡な人生を過ごしていたと記憶している。まさか、それが夢だったなんてこともあるまい。
「言ったであろう、この世界には複製する機能が備わっていると。他の世界から文化や技術をランダムに丸ごと複製し、その中で優れた結果を残した選択が後の世界に引き継がれていく。そうしてこの世界は進化してきた……シンという存在は、己が知る限り、三度複製されている」
言われてみれば、思い当たる節がある。
この世界に来て、古代都市でＤＶＤと思しきものが見つかった。この魔物の街は、江戸の街並みによく似ている。ナマクラ丸が前の魔物使いについて語るとき、俺の知っている知識が何度も出てきた。レイスの遺跡を二度目に訪れたときゴブリンが生まれたのは、この複製の機能を使って旧世界から呼び出したということだろう。
しかしそうなると俺という存在は、日本に住まうカミヤ・シンの複製品に過ぎないということになる。
「錆刀丸よ、お主は千年前に存在していたあの刀で間違いないのだな？」
「おうとも。俺の記憶に間違いはねえ」
さっき、間違えたばかりじゃないか。本当に調子のいい刀め。
というか、そんな名前だったのか。前の魔物使いに貰った名前と言っていたが、別の俺がつけたってことだろう。
「これからは錆刀丸って呼んだほうがいいのか？」
「いんや、これまで通りでいいぜ、親友。今は親友の刀だからな」
ナマクラ丸が言う。
そう、親友だ。出会ったときから言っていた。
馴れ馴れしい奴だなあとばかり思っていたが、ちゃんと意味があったというわけだ。千年ぶりに会って、ほとんど覚えていないながらも俺を親友と呼んだこの刀は、主君に尽くす侍の魂を持っているのかもしれない。
しんみりとする俺に鬼は続ける。
「そして来年には、新世界が生まれてから丁度千年がたつ。再び選択のときが訪れ、旧世界と新世界が争い、どちらかが生き残ることになろう。我々は決断を迫られているのだ。無理強いはしない。戦うも、逃げて最期を待つのも自由だ、シン」

「困っているなら俺は手を貸すよ。よくわからないけれど、できることならやろう」
自然とそんな言葉が口をついて出た。なんとなく懐かしい気がした。
鬼はふと笑い、俺の前に立つ。見た目だけじゃなく存在が大きくて、俺は息を呑む。千年もの重みを実感せずにはいられない。
「ならば手を貸してくれ。己と千年前のお主から受け継いだ記憶と力を、受け取るがいい」
告げるなり、鬼の体がふっと煙になって俺の体に巻き付き始め、ゆっくりと力が体内に染み込んでくる。今のこの姿は、絡新婦の屋敷にあった魔物使いの像とよく似ているのだろう。
クーナとライムが慌てて俺に駆け寄ってくる。
問題ないと二人に言おうとするも言葉にはならず、俺は心地よい懐かしさに身を任せて静かに意識を手放した。

2

鬱蒼と茂る森を歩いていく。
足は勝手に動き、視界は目まぐるしく変わる。そこに俺の意はまったく介していない。
だからこれは夢に違いない。

そう考えた俺はのんびりと構えて、勝手に変わる風景を楽しみ始めた。
先ほどまで森の中にいたかと思いきや、いつの間にか街道に出ていた。俺の隣には、小さな緑の頭が見える。ゴブリンだ。
俺はあの間抜けなゴブの姿を思い浮かべたが、すぐにそんなわけないな、と判断する。その緑の小鬼はするすると木登りして、俺にぽんぽんと果実を投げてよこすなり、すたっと着地したのだから。ゴブならば足を滑らせ頭を打っているに違いない。
そんなゴブリンと一緒に歩いていると、またしても光景が流れていく。俺はぼんやりと、眺めるばかり。
次にはっきりと見えたのは妖狐の集落だった。
俺はオークに襲われていた里を思い出す。それと比べると妖狐の数が少なく、家々もほとんどない。どうやら外で生活しているようだ。
狐たちが楽しげに走り回っている中、俺は角が生えたゴブリンと一緒にいた。そのほかに、小さなドラゴンが増えている。
集落の中を歩いていくと、狐耳と尻尾が生えた二人の女性と出くわす。一人は微笑み、俺に抱きついてきた。
嬉しい状況だが、触感がないため幻でも見ている気分になる。いや、実際そうなんだろうけれど。俺にそういうことをしてくれるのは、ライムとクーナくらい――

と、そこで俺の記憶に引っかかるものがあった。
クーナの里には伝説の魔物使いにまつわる口伝があったと聞いている。魔物を合成したという内容だと言っていた。ということは、これは千年前の俺の記憶なんだろうか。
そうして見れば、女性の顔には見覚えがあった。尻尾があるため気付かなかったが、クーナの里の姫さんと瓜二つだ。このときから千年を経て、天狐から空狐へと進化を遂げたのだろう。もちろん、確証はないけれど。
俺は姫さんのそっくりさんをその場に置いて、もう一人の狐娘さんと歩き始める。
悲しげな姫さんの顔が視界の端に消えていったかと思いきや、もう場面は変わっていた。
木々が枯れ、大地が割れた土地が広がっている。空がどんよりと曇り、たびたび雷が落ちる。とても人が暮らしていけるような環境ではない。
そこにいる俺の近くには、数多の魔物が集まっている。目立つのは、黄金色の毛並みが美しい妖狐、鮮やかな緑色の鱗を持つ大きな竜、そびえ立つ巨人。そして俺が乗っている鬼だ。
かつてライムと一緒に読んだ本に記されていた魔物たちである。あの伝説は嘘ではなかったのだ。
俺が指示を出すと、十体の魔物が前に出た。
続いて百の魔物が一斉に動き出し、さらに千の魔物が地を踏み鳴らした。
そうして向かっていく先に、立ちはだかる魔物の姿が見え始める。上空を闇が覆ったかと思えば、飛び下りてくる影とともに鋭い刃が煌めき――

◇

攻撃を防ぐべく、咄嗟に腰の刀を抜かんとした俺であったが、掴んだのは布団であった。
木目の入った天井が見える。それから障子や襖など、和風の様式が目に入った。
あれ、俺はなにしてたんだっけ。確かゲームをやってて、それから……
ここは俺の家か？　まさか。そんなはずはあるまい。こんな立派な屋敷なんか知らないし、お金持ちのお嬢様も知り合いにいない。
さて、どういうことだろう……
少し頭の中を整理しようとした瞬間、声が聞こえた。
「お目覚めか、我が主よ」
ぬっと眼前に現れたのは鬼の頭。
「うわあ、なんだ！　……ってお前か。まったく、驚かせるなよ」
俺は安堵の息を吐く。
近くをふよふよと飛ぶ鬼の頭を見ていると、少しずつ冷静さを取り戻していく。
「寝ぼけていたようだから、荒療治が必要かと思ってな」
「まったく、お前というやつは。えーっと……なんだっけ、鬼太郎でいいんだっけ？」

どうやら記憶が定着したようだ。具体的なエピソードとかは言えないが、千年前の俺が持っていた知識が頭の中にある。
「覚えていたのか。その通りだ」
「しょうもない名前だな」
鬼太郎は顔をしかめた。
そういえば、ナマクラ丸も前の名前はネーミングセンスに欠けていたなあ。
俺はゆっくりと、あの夢の続きを思い出す。切り掛かってきたのは俺自身だ。旧世界と新世界の戦いがあったのだろう。
戦いの結果、旧世界の俺、つまり二千年前の俺が生き残っているのはなんとなくわかる。だからこそ、再びこの世界に危機が迫っているのも。
では、千年前の魔物使いはどうなったのか。
鬼太郎がここにいることや、姫さんに会っていないことから、おおよそ推測はできる。
やっぱり聞かないことにしておこう。実際に自分の耳で確かめてしまうと、実感を持ってしまうから。何事も知っていればいいというものではない。最後まで曖昧なほうがいいことだってある。
「死んだぞ」
「せっかく聞かないようにしていたのに！」
まったく、配慮ができない鬼である。どうして俺の魔物たちはこうなのか。

……そういえば、本当に俺の魔物になったんだろうか。
主従契約のスキルを用いると、八体目の魔物が確認できる。

《鬼神　Lv 1》
ＡＴＫ 999　ＤＥＦ 999　ＭＡＴ 999　ＭＤＦ 999　ＡＧＩ 999
【スキル】
「身体強化」「身体変化」

なにこのスペック。どうなってるのこれ。
どうやらステータスの数値は999が限界のようだ。となれば、最強の魔物同士は、技量の違いで優劣が決まるのだろう。
「身体強化」は常に強化されるだけでなく、一時的に底上げすることもできるようだ。そして「身体変化」は、鬼の体を用いることができるスキルらしい。
それにしても、このステータスが還元されるということは、俺も……
気になって仕方がないので、自分自身のステータスを鑑定してみる。

《シン・カミヤ　Lv 99》

ＡＴＫ858　ＤＥＦ857　ＭＡＴ808　ＭＤＦ770　ＡＧＩ737

【スキル】

「大陸公用語」「鑑定」「主従契約Lv９」「魔物合成」「小型化」「ステータス還元Lv９」
「成長率上昇Lv９」「バンザイアタック」「スキル還元」「スキル継承Lv９」「血の代償」
「経験値継承」「経験値増大」「盟主」「炎魔法Lv９」「氷魔法Lv９」「水魔法Lv９」
「幻影術Lv９」「神通力Lv９」「風魔法Lv９」「魔力弾」「身体強化」「身体変化」

「……なにこれ」

「言ったであろう、前のお主の力を継承すると。増えたスキルはそのためだ」

増えたのは、合成しても経験値を引き継げる「経験値継承」と「経験値増大」、「盟主」の三つだ。

「この『盟主』っていうのがよくわからないんだけど」

魔物を束ね、ステータスを還元してもらうスキルっぽいが、いまいちよくわからない。

「魔物たちの盟主になるということだ。お主が従える魔物の下に、さらにグループを作成することができる。ピラミッド型の構造が出来上がり、お主に力が集約されることになる」

どうやら、主従契約をしている魔物の下に二番手の魔物を十体つけられるらしい。その二番手の魔物の下にさらに三番手を十体、と階層構造を作ることができるようだ。そのたびにステータス還元の恩恵は小さくなっていくため、強い魔物を上位においたほうがいいことになる。

それにしても、実感が湧かない。これが俺の力だなんて。

本当に、世界の命運を分ける戦いに赴くことになるんだろうか。

そんなことをぼんやりと考えていると、慌ただしく駆けてくる足音が聞こえて、飛び込んできたのは、俺の魔物たちである。

「ぐはっ！」

ケダマが転がってきて、俺の胴体に直撃。クーナとライムがぎゅっと抱き着いてきた。ゴブやウルフが俺を頻りに叩き、ポンコツ丸がナマクラ丸を俺の腰に差す。

「なんだよお前ら、大げさだなあ。ちょっと寝ていただけだろ」

見回すと、ライムもクーナも涙目になっていた。

そして咎めるような顔をする。そんな表情さえも実に素敵なのだから、なんともずるい。

「一年間、眠ってたんですよ」

そう、クーナが告げてきた。

俺はしばし呆気にとられながら、魔物たちと言葉の重みを実感していた。どうやら俺が思っている以上に、事態は深刻だったのかもしれない。

衝撃の事実を告げられた俺はなにかを告げることもできずに、腹を鳴らした。

「……お昼にしましょうか」

クーナがちょっと呆れたように言う。シリアスな雰囲気が台無しだ。

しかし、これも仕方ないことである。俺は数日寝ていたくらいの感覚なのだから。一年と言われたって、ドッキリとしか思えない。

起き上がろうとするも、俺はうまく体を動かせずに倒れ込んだ。

まだ頭は寝ぼけているようだ、と思うのだが、何度やっても同じことだった。そこで俺はようやく、一年という長い年月を実感する。長期間、動かないでいて筋力が落ちてしまったのだろう。

クーナとライムが肩を貸してくれ、ウルフの上に乗っかって廊下を進んでいく。どうやらここは鬼太郎がいた屋敷のようだ。

情けない格好で進んでいった俺だが、目的の一室に到着すると、小鬼たちが料理の準備をしてくれるそうで、それまで寛ぐことにした。

俺は手を握ったり開いたり、足を動かしたり、体の具合を確かめる。まるで老人になった気分だ。ステータスの恩恵も、これではあってないようなものである。

「一年もかかるなら、先に言ってくれればいいものを」

俺が愚痴をこぼすと、俺の前腕からにゅっと鬼の頭が出てきて返事をする。

「そんなにかかるとは思わなかったのだ。許せ、主よ」

そう言われてしまうと、いつまでも愚痴るのは器が小さく思われる。過ぎたことだ、気にしないようにしよう。

腕から生えた鬼の頭を見て、俺はふと思う。

「なあ、四六時中一緒ってことはさ、プライバシーとかなくないか？」
「心配するな。己は主がどのような趣味を持っていようと気にはせん」
「俺に問題があるみたいに言うなよ！」
ゴブが俺のところにやってきて、仕方ないなあ、みたいな顔をして肩を叩く。
なんだよくそ、ゴブの癖に。一年間で増長してやがる。
しかし、やはり体がうまく動かないのでゴブをあしらうこともできない。
それだけじゃない。ライムもクーナも、ちょっと呆れたような表情をしている。
なんか、俺がすごくダメな主人みたいな立場になっているのはなぜだろう。時の流れは残酷だというのか。
結局、鬼太郎は呼び出さないときは大体眠っているらしく、意識はないそうで、とりあえずプライバシーの問題は解決したといえよう。ただ、俺に危機が迫ったときなどは覚醒するらしい。
そんなことを考えていると料理が運ばれてきて、ケダマが嬉しげに鳴き声を上げた。
こやつは変わっていないなあ。なぜだか安堵してしまう。
早速、ケダマはむしゃむしゃと美味しそうに食べ始める。そこで俺は気付いてしまった。ケダマすらこの一年間に進化しているということに。
そう、変わらないはずがない。ケダマだって成長しているのだ。見た目の大きさだけでなく、中身も。

ケダマは箸を使えるようになっていた！
……どうでもいいな。
下手くそに箸を使っていたケダマだが、漬物の切れ端をじっと眺めると、世界の命運を握っているかのような表情を浮かべる。
なにかあるんだろうかと思いきや、漬物の切れ端をつまんで、俺のところに持ってきた。
なんということだ。人のものばかり食っていたケダマが、人に分け与えることを覚えたとは。
きっと、快気祝いということなのだろう。
俺はちょっと感動してしまう。
「いや、そんな切れ端貰わなくていいから。ケダマが食いなよ」
そう告げるとケダマは嬉しげに漬物の切れ端を放り投げ、ぱくりと口でキャッチ。美味しそうに口を動かしながら、自分の膳のところに戻っていって食事を始めた。もう箸は使っていない。やっぱり前足で使うのはめんどくさいのかもしれない。
俺は箸を何度も落としながらも食事を進めていく。
「鬼太郎、ちょっと醤油取って」
早速呼び出された鬼太郎は、俺の腕からにゅっと頭と腕を伸ばして醤油の瓶を取ってくる。
これ、便利だな。かゆいところに手が届くというか。
一方で鬼太郎は困惑気味である。こんなことで呼ぶなとでも言いたげだ。便利なんだからいい

じゃないか。
と、そこでどうやらこれが身体変化のスキルの一部であることがわかる。このスキルを使えば、腕を何本も生やせるかもしれない。
そうこうしているうちに食事も終わって、満腹になった俺は寝そべる。お行儀がよくないが、なんだか疲れてしまったのだ。
「親友よお、お疲れのところ悪いんだが、話をしてもいいかね？」
「構わないよ。なんだ？」
「えっとだな。なんて言ったかな、そう、あれを集めなきゃならねえんだよ。黒い奴」
「……すまん、誰か代わりに話をしてくれないか」
要領を得ないナマクラ丸の代わりに、ライムが説明してくれることになった。
「あのね、シン。前に古代魔術師と戦ったとき、私が取り込んだ黒い塊があったよね。あれが、この世界の力の源なんだって。合成のスキルを使うと強くなるのは、これが濃縮されていくからみたい。それでね、その力を使えば旧世界と新世界を繋ぐこともできるの」
引っ込み思案だったライムが、にこにこと笑顔で俺に語る。娘が独り立ちするのを見る父というのは、こんな気分なんだろうか。嬉しくもあり、寂しくもある。
俺は千年前の記憶の中から、その黒い塊に関する情報を引っ張り出す。確か魔石と呼ばれていた気がする。

魔石は魔物が死ねば土に還り、それを植物が吸い上げ、さらにそれを食らった魔物が取り込む循環の中にあった。そうして世界中に万遍なく広がっていたが、合成のスキルを使っていくことでガンガン取り込めるのだ。強い魔物ほど魔石を蓄えていることになるので、そいつを取り込めば、かなりの量になるだろう。
そうしてこの世界の一部を担っている魔石だから、旧世界の消去も、二つの世界を繋げることもできる。
「シンさん。実はこの一年の間に、すでに一度だけ旧世界との繋がりはできてしまっています。向こうの世界から魔物が流れ込んできて、滅びた国家もあるようです」
クーナが深刻な事態を告げる。
俺はなんとなく推測ができた。たぶん、旧世界の俺が仕掛けてきたことなんだろう。破滅を待つのではなく、この世界を乗っ取ることで生きながらえようとしているのだ。
いつまでも侵攻が持続しないのは、旧世界と新世界との距離が近づく時期――恒星と新世界、そして旧世界が同じ水平面に並ぶ夏の時期だけしか移動ができないからだそうだ。
なんとも大事になっているが、実感なんか湧きやしない。
どうしたものかと思っていると、銅鑼が鳴った。ガンガンと響く音に混じって、外から小鬼たちの慌てたような声が聞こえる。
なんだろうか、と呑気な俺を尻目に、クーナやライムが立ち上がる。そしてキリッとした表情の

ゴブが一目散に走り出した。
「シンさんはここにいてください」
そう言い残して行ってしまった彼らの後姿を見ていた俺だが、ケダマもポンコツ丸もウルフも行ってしまったので、俺のところにはナマクラ丸しかいない。
……こいつを使えばなんとかならないだろうか。
そう思ってナマクラ丸を握るも、いかに技能が高くなろうとも筋力が低すぎてろくなことにはならなかった。次に鬼太郎から還元された「身体強化」のスキルを使用する。
以前と同じまでにはならないが、強くない魔物くらいなら倒せそうな程度にはなる。
言われた通りにここにいようとは思うが、状況くらいは把握しておきたい。こっそり襖を開けて外を眺める。
もう小鬼たちの姿はなく、代わりに大きな鬼が棍棒や剣を持って空を眺めていた。そこには、飛び交う大量の魔物の姿があった。
とりわけ問題となっているのは、巨大なワシ頭の鳥と、緑色のトカゲの二体。それらが動き回り、物を落とすたびに、地上の魔物は翻弄されていた。
俺は鑑定スキルを発動させる。

《グリフォン　Lv55》

ATK 172　DEF 125　MAT 114　MDF 182　AGI 291

【スキル】

「風魔法Lv5」

《ワイバーン　Lv46》

ATK 298　DEF 158　MAT 139　MDF 182　AGI 211

【スキル】

「風魔法Lv5」「炎魔法Lv5」

うわあ、これは倒せそうもないなあ。
周りにいる雑魚の魔物はともかく、あの二頭はちょっとまずい。
以前の俺ならば、なんとか倒す方法を考えたのかもしれないが、今はどうにもならない。言われた通り引っ込んでいるしかないのである。
さて、どこに逃げようか。逃げ場なんかない気もする。
そんなことを考え始めたとき、ワイバーンが俺のほうを見て突っ込んでくる。
ど、どどどどうしよう！
やがて火を噴かんと口を開けたワイバーン。俺がナマクラ丸を抜いてひとまず応戦の構えを取っ

た直後、巨大な丸い塊が飛んでいった。
ワイバーンをあっさりと弾き飛ばしたそれは、ケダマである。どうやら、俺がいなくても小型化を解除できるようになったらしい。
そのまま宙を自在に舞うケダマ。風魔法で飛んでいるのだ。
地上に落ちたワイバーンには鬼たちが群がって切り倒していく。
空飛ぶケダマは次々と空中の魔物に体当たりをかましている……あんなの俺が知ってるケダマじゃない。
俺が知っているケダマは、空を飛んだかと思えば、そのまま地上に落下してバウンドしていたはずだ。もはやすっかり過去の思い出となってしまったのか。
それだけじゃない。
ポンコツ丸が空を飛びまわり、その上に乗ったライムが魔法弾で次々と敵を仕留め、ゴブを背に乗せたウルフも氷魔法で敵を落としていく。そしてグリフォンに接近すると、ゴブがそちらに飛び移って、棍棒を振り下ろした。
その衝撃でグリフォンは気を失って落下し、ゴブも反動で飛ばされて地上に落ちてくる。
俺は記憶の中にあった、かっこいいゴブリンを思い浮かべていた。すたっと着地するゴブリンを。
だが、ゴブはうまくバランスを取れずに頭から地面にぶつかった。俺はちょっとだけ、ほっとしてしまう。

そんなゴブであるが、鬼たちが群がってグリフォンを叩き始めると、なにやらポーズを決める。
鬼たちはグリフォンを倒すのに必死で、一体もゴブを見ていない。
その姿を見て、ああやっぱりゴブなんだなあ、と俺はすっかり安心した。
間もなく魔物たちは片づき、ポンコツ丸と一緒に皆が降りてくる。あれが旧世界から来た侵略者だったのだろう。
俺の出る幕ないなあ……
寂しく思っていると、ゴブが俺のところにやってきて背中を叩き、虫の息になったワイバーンを示す。
魔物合成は俺だけの特権らしく、早速やってくれということだ。
俺が主従契約のスキルを発動させると魔法陣が浮かび上がり、ワイバーンに絡みつく。主従契約が成立すると、早速ゴブはその中に入って、合成が開始された。
眩い光が消え去ると、そこにいたのはゴブリンである。ただし、背中には小さな羽。
ぱたぱたと動かすと、地面からちょっとだけ浮いた……それだけである。虫みたいだ。

《羽ゴブリン　Lv22》
ATK 713　DEF 605　MAT 275　MDF 221　AGI 648
【スキル】

「風魔法Lv5」

「経験値継承」のスキルのおかげでレベルが高くなっているとはいえ、ゴブまでこんな強くなってるのか……

そりゃそうだよな。俺自身のステータスを見たときに気付くべきだった。なんせ、俺の力はほとんど、魔物たちから還元されたものなのだから。

そんなゴブはようやく出てきた小鬼たちに自身の英雄譚を聞かせ始めた。小さい鬼にもかかわらず活躍できるということで、憧れっぽいものを抱かれているようだ。ゴブの癖に。

それからも俺は一人だけ蚊帳の外で、小鬼たちが後処理で慌ただしく動くのと一緒に俺の魔物たちが働いているのを眺めるばかり。

「親友、そのうちいいこともあるさ」

ナマクラ丸の励ましを聞きながら、俺は再び部屋に戻って寝転がった。

3

まだ誰も起きていない早朝、俺はせっせと廊下を歩いていた。そう、頑張って歩いているのだ。

走る体力なんかすでになくなっているし、これでさえ数分とたたずに疲れきってしまう。

なんとも情けないことだが、だからといって怠けていては一生動くのもままならないし、少しずつでも元の力を取り戻していくしかない。

身長が俺の半分もない小鬼に横を抜かれていくのだって、恥ずかしくはない。ああ、恥ずかしくないとも。

しばらくそうしていたが、やがて限界が来ると廊下にそのまま寝転んだ。ひんやりした冬の廊下は心地よい。

「親友よお、もう一週間もこうしているが、変わんねえなあ」

「当たり前だろう、一年も寝ていたんだぞ。いくら鬼太郎がくっついて体が不調にならないようにしてくれていたって言っても、筋力低下は免れられなかったんだよ。まったく動けないお前には言われたくないね」

俺は刀を軽く持ってみる。

感覚的にはすぐに馴染んでくるが、いざ動かしてみるとイメージに体がついてこない。

こんなんで大丈夫だろうか、と少しばかり不安になってくる。

旧世界と新世界が再び繋がるのは次の夏だ。半年くらい先ではあるが、それまでに万全の状態まで戻さなければならない。

そしていつまでもリハビリばかりをしているわけにもいかない。この世界には旧世界からやって

きた魔物が蔓延っており、それらを捕まえて片っ端から合成していかねばならないのだから。
この鬼太郎のいる土地に近ければ近いほど、土着の魔物は強いため、外来の魔物にも対抗できている。それゆえに敵が都市を占領することもなければ、勢力を拡大することもない。
一方、ここは正反対の場所――俺がこの世界に降り立った地なんかは強い魔物がいないため、すでにあちこちの都市が落とされているとのことだった。なにもしなければ、これからの半年の間にこの世界の半分以上が占領されてしまうだろう。
気分のいい話ではないが、それはともかくとして、最終決戦に勝つためには魔石をどんどん集めていかねばならない。こんなところで寝転がっている時間は惜しいのだ。
クーナたちがなんとかしてくれるのは確かだが、魔物合成ができるのは俺だけだから、やはり俺が立たなければならないのである。それこそが、彼女たちが一年の間、俺を待ち続けた理由なのだろう。
俺はごろりと寝返りを打って鬼太郎を呼び出す。
「なんだ我が主よ」
「すまないんだけど、背中かいてくれ。汗で張り付いてかゆくてさ」
鬼太郎は顔をしかめつつも、代わりに背中をかいてくれる。
俺は「もう少し上」だとか「そこそこ」だとか指示を出しながら、欠伸を一つ。十分寝たはずなのに、体力がないせいで眠くて仕方がないのである。

「……そういえばさ、お前と一緒にいた魔物たちってどうなったんだ？　まさかナマクラ以外全員死んだってこともないだろう？」
魔物は長寿のものが多いし、争いで死ぬ確率が低くないとはいえ、あれほど強い魔物ならばそうそうやられないだろう。
鬼太郎は少し答えに窮していたが、やがて「二体は残っている可能性がある」と告げた。
一体は巨人、もう一体は巨大な竜だ。しかし、彼らが今どこでなにをしているのかどころか、生きているのか死んだのかも知らないらしい。千年も過ごしていれば当然かもしれない。
それ以外は戦いの最中、あるいはその後にすぐ亡くなったり、老衰を迎えたりと様々な結末があったようだ。
そうなると、俺も最期のことをなんとなく考えてしまう。どんな運命が待っているのかはわからないが、彼女たちと笑い合って――
「シン、大丈夫？」
その声とともに、ひんやりと冷たいライムの手が俺の首に触れる。
運動で火照った体から熱が奪われていくのが心地よい。だから俺はしばらくそのままでいた。
覗き込んでくるライムの顔が見えて、なんとなく安心する。一年たっても、俺と彼女たちの関係はあまり変わっていない。もちろん変わったこともあるが、大切な部分はなにも変わっていなかった。そのことがなによりも嬉しくて、彼女たちと一緒にやっていくために頑張ろうと思う。

ゆっくりと体を起こすと、ライムが肩を貸してくれるので一緒に部屋に戻る。
それから俺は、布団からはみ出して眠っているゴブの鼻提灯を砕き、腰の辺りをくすぐる。
「ゴッゴブブ、ゴ、ゴビュ！」
なんか変な声が聞こえたが、気にしない。
さらにウルフに起こされたはずなのに、仰向けで居眠りしているケダマの腹をもぞもぞといじると、ぱちくりと目を覚ました。そしてまた眠たげにまぶたを閉じかけたので――
「起きないと朝食なくなるぞ」
「がおー！」
元気に起きたケダマを放り投げて、俺たちは朝食を食いに行く。
ポンコツ丸は一晩の間に冷えきって、きびきびとは動かないし、なんだかとても世界の命運を握るパーティとは思えない。
けれど、やっぱりこのほうが居心地はよい。
それから簡素な朝食を取り終えると、小鬼たちが小包を持ってきた。中にはお弁当が入っているそうだ。
彼らはお礼を言い、鬼太郎のことを頼むと告げてくる。ちょっと抜けたところがある鬼も、信頼されているようだ。
今日、俺はこの屋敷を出ることにしていた。普段はろくに歩けないとはいえ、身体強化のスキル

**立ち読みサンプル
はここまで**

を使えば、ギリギリ戦えないこともないレベルにまで体力は戻ったから、少しずつ目的を果たすべく、旧世界の魔物の拠点を潰していくことにしたのだ。
小鬼たちに見守られると、ゴブは髪を掻き上げる仕草を見せる。髪なんか生えてないけど。
そして渋い（ゴブの主観）ところを見せながら、屋敷を後にする。
俺が次に戻ってくるときは、いくつもの魔物を倒したときだ。それまでは、帰ってくることはないだろう。ああ、タダで食う飯は旨かったなあ。
固く決意して去った俺だったが、何度も石段を下りていくうちに気分が悪くなってきたので、狐姿のクーナの背に乗っかった。
彼女の毛並みは出会ったときからいいが、最近はますます綺麗になった気がする。柔らかな毛を堪能しているうちに、俺はうとうとして、そのまま眠りこけてしまった。

◇

気が付いたときにはすっかり町の外れまで来ていた。
これから先は敵の魔物もいる場所だと思うと、こんなことではやっていられない。
俺は気合を入れるが、クーナは足を止めていた。
ここらでなにかあるのかと見回しても、ゴブは先ほどの自分の姿を思い出しているのかいまだに